

仏教的宇宙観「須弥山（しゅみせん）」

1. 仏教的宇宙観の普及活動

仏教では、古代インドの宇宙観を受け継ぎ、世界は須弥山を中心に立体に広がっていると解いて、西洋の地動説に対して天動説を説いた。地動説が広まることにより仏教の権威が失われることを恐れた天台宗の僧円通（1754～1834）は、インド起源の須弥山宇宙説を人々の間に広めるために、「仏国曆象編」を著わし、仏教天文説を目に見える形で表した時計仕掛けの「須弥山儀」を考案した。仏教天文説の普及運動は、円通の弟子環中禅機や孫弟子の晃徹によって受け継がれた。その二人の依頼により「須弥山儀」は「からくり儀右衛門」として有名な、東芝の創始者、田中久重の手によって弘化4年（1847）着工、嘉永3年（1850）に完成したといわれている。現在日本で所蔵が確認されているのは5基で、動くものは和歌山立正寺のものと同谷大学所蔵のもの2基だけである。

東芝科学館所蔵の「須弥山儀」は動くと言われているが、未調査の段階である。



須弥山儀

2. 須弥山儀の概要

この須弥山儀は、仏教の宇宙観である須弥山説（天動説）に基づき、西洋のオーレリー（天球儀）からの影響を受けて作られたと思われる。

構成は6ブロックに大別される。

- i) 全面ガラス張りの豪華な天蓋部のカバー部
- ii) 最上段は天界駆動機構と24節気部が収まっている天蓋部がある。
- iii) 2段目が機構部を収納する胴で和時計の割駒式文字盤がはめ込まれている。
- iv) 3段目が須弥山を中心とする世界
- v) 最下部は全体を支える猫足を持った円盤状の台
- vi) おもりが動くスペース台部

表示される内容は、時刻（固定指針・割駒式文字板の不定時法）、太陽と月の運行（2個の小球が回転）、24節気（指針と専用文字板）、星宿（星座）及び北斗7星（小円盤）の動き、そして和時計式の打方が付いている

また、動力は1つの「おもり」で時計機構と鐘を打つ機構との両方がそれぞれ動作し、おもりを十分に巻き上げると一昼夜十分動く仕組みになっている。



須弥山儀



和時計の割駒式文字盤



24節気



おもり

3. 須弥山とは

仏教の宇宙観によると、虚空中に巨大な円盤状の風輪（空気）が浮かんでおり、その上に水輪（流水）・金輪（地層）があり、その表面には九山・八海・四大洲などがのっている。

中央の山は高さ8万由旬（56万km）の須弥山で、中腹には四天王（注1）が、頂上には帝釈天を主とする三十三天宮（注2）があり、さらにその上空には六欲天の世界が広がっている。

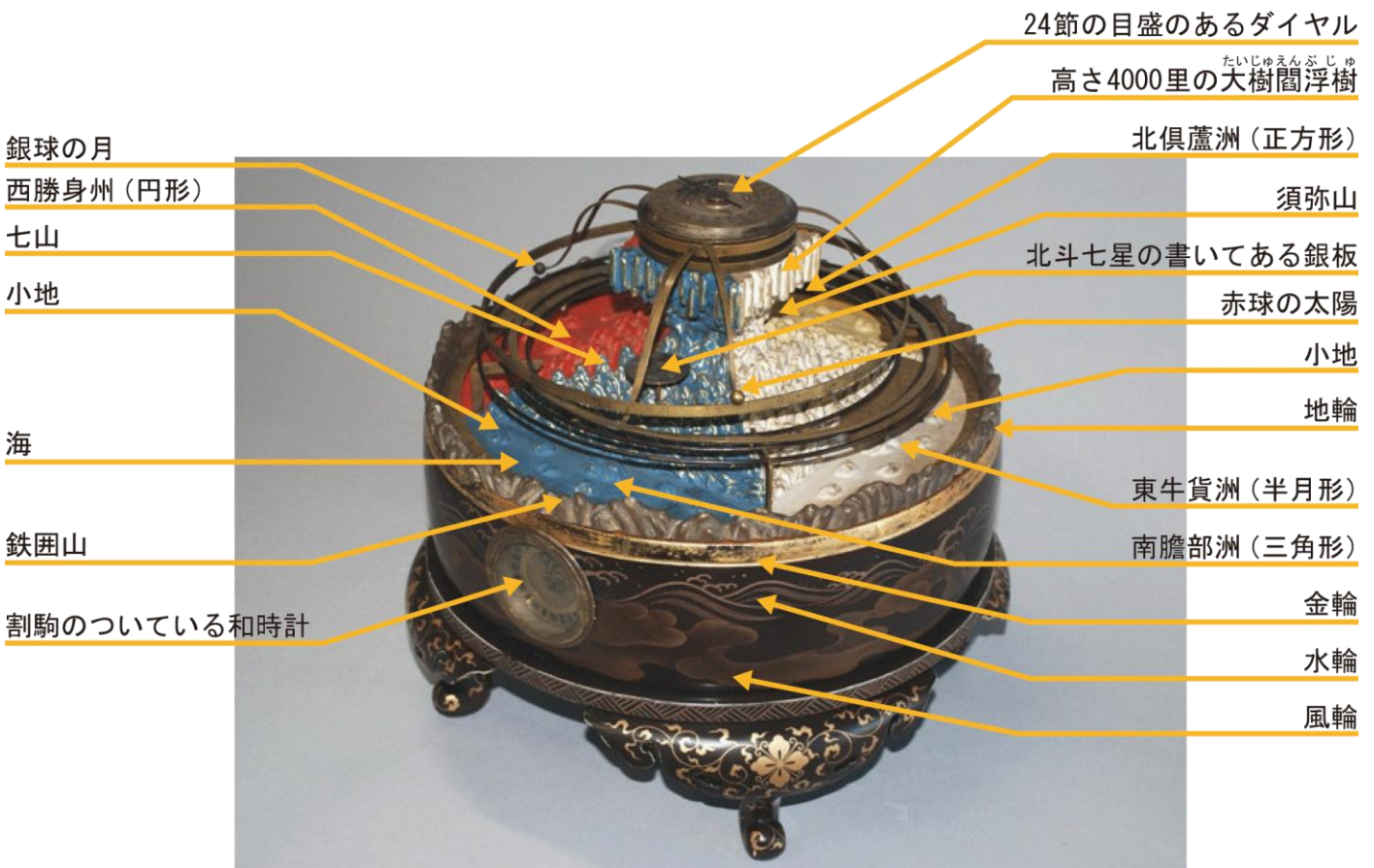
この須弥山を七つの山脈が囲み、その外側は大海で四つの島、白い部分は東牛貨洲（こげしゅう）、青い部分が南瞻部州（せんぶしゅう）、赤い部分が西勝身州（しょうしんしゅう）で、黄色い部分の北俱蘆洲（くるしゅう）が浮かんでいる。人間はその中の青い部分、南瞻部州に住んでいて、その地下は地獄である。

この島の形はインド大陸を形取ったものといわれ、仏教はインドが発祥地であることから、ヒマラヤを須弥山に見立て、その南の大陸に人々の住む世界があるとする仏教的宇宙観を表わしたものである。大海の外側は鉄圀山（てっせん）が囲み、空には太陽と月が運行しておりこれが須弥山世界である。これらを經典に基づいて具体的に構造化したものが須弥山儀である。

（注1） 四天王：須弥山の中腹に仏教を守る四人の神様住んでいます。

東方 持国天（じこくてん） 西方 広目天（こうもくてん）
南方 増長天（ぞうちょうてん） 北方 多聞天（たもんでん）

（注2） 三十三天：須弥山の頂上にいる天部。中央に帝釈天、四方に各8人ずつで32天
1天+32天で合計33天がいる世界



参考資料「世界の腕時計」N03 1 H9年発行